

中国および香港：中国人社会の個性に注目して

帆刈, 浩之 / Hokari, Hiroyuki

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

628

(開始ページ / Start Page)

10

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

2011-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008206>

中国および香港——中国人社会の個性に注目して

帆刈 浩之

はじめに

- 1 慈善の「発見」：近代から1980年代まで
- 2 「市民社会」への展望：1980年代以降
- 3 華人社会の個性として

まとめ

はじめに

日本ではあまり知られていないが、香港では慈善を冠したイベントが盛んである。特にスター歌手が多数登場する「慈善演唱会」の人気は高く、TVでの視聴率も高い。こうしたイベントは英国植民地統治期からつづく「伝統」文化になっていると言ってもよい位だ。香港の慈善組織は華南地域の経済一体化の流れとともにその活動を活発化させている（芹澤 1996, 1997）。また、近年では経済成長著しい中国でも同様のイベントが開催されている。東南アジアを含む華人世界において慈善は年中行事と化しているのだ。また、アジアの著名な慈善家のリストを見れば、そのほとんどが中国系であることがわかる。

こうした華人社会における経済発展を背景にした慈善熱の源流はおそらく明清期の都市の成長、商業発展、商人の台頭に求められるだろう。この時代、儒教秩序の維持に益する商業活動は必ずしも儒教倫理に反しないという認識が広がっていった。慈善は士大夫のみが行うものではなく、商人たちも自らの社会的名声を獲得できる行いだという商業文化が形成されたのである。

明清期中国の人々が考える「善」なるものの実践は「善挙」と称された。例えば、「育嬰」^{じゅつり}「恤嫠」（寡婦救済）^{せんろう}「贍老」（養老）「施棺」（棺柩の供与）^{ぎちよう}「義塚」（共同墓地）「施医」「施薬」「惜字」（文字や紙をうやまう）などがある。個人が自発的に参加し、こうした善挙を共同して行う結社を「善会」という。そして、そのために設けられた施設を「善堂」といった。さらに勧善のための書物のことを「善書」と称した。

さて、日本の中国研究において、慈善、あるいは善会・善堂に関心が向けられた時期には明確な特徴がある。まず、日清・日露戦争後から日中戦争期にかけて日本は経済的・軍事的拡張をはかるため、中国で様々な社会調査を行い、その中で慈善を「発見」したのである。そして、その後、再び慈善の歴史に関心が向けられるのは1980年代になってからである。その間、日本でも中国でも善

会・善堂の存在は歴史研究の対象としては完全に無視されていた。当時中国では社会主義改造が行われ、慈善団体の資産は没収され、解散させられたばかりか、その歴史も抹消されたのである。しかし、1980年代、中国が改革開放政策に転じ、新しく社会史の手法が導入されることによって慈善の歴史は「再発見」されることになる。

このことから中国の現実の政治情勢が中国ばかりか日本の歴史研究に大きな影響を及ぼしていたことがわかる。しかし、問題は中国以外の華人社会（香港・台湾・東南アジアなど）では各種の慈善団体は活動し続けてきたという事実である。中国史において、慈善というテーマを考えることは、一国史観の問題や歴史研究の脆弱さを再認識させる契機になりうると言える。

さて、明清期から近代にかけての善会・善堂、慈善組織に関する歴史研究はすでに夫馬進や小浜正子によって整理されている（夫馬 1997, 小浜 2007）。本稿ではその研究史整理を参考にしながら、明清期から近現代にかけての慈善に関する研究を紹介したい。なお、歴代王朝による社会救済（「救荒」）の歴史については、鄧雲特や星斌夫など多くの研究があるが、慈善の範疇には入らないのでここでは扱わない（鄧 1937, 星 1988）。

1 慈善の「発見」：近代から1980年代まで

ヨーロッパ人が中国社会に慈善活動を「発見」したのは19世紀である。キリスト教の布教あるいは経済進出のための社会調査が行われ、そこで中国人社会において慈善が広く行われていることが記録された。プロテスタント・ミッションによる出版物である *Chinese Repository* ⁽¹⁾ の中に西洋人による慈善医療や中国人自身による救済活動の紹介記事が見られる。それは次第に単なる見聞録の域を越え、中国側史料を用いた研究レベルにまで達していった。しかし、キリスト教世界から異教世界を評価するという限界を有していた。

こうした中、中国の善会・善堂を高く評価する研究を行ったのが、Tsu Yu-Yue（朱友漁）である。彼はコロンビア大学から *The Spirit of Chinese Philanthropy* という本を出し、中国の古代思想から20世紀初めの都市に見られる民間慈善団体の活動までを簡潔に紹介している。結論として中国の慈善は土着のものであり、民間の慈善団体は自立的に運営されており、「実質的な民主主義」が見られると高く評価した。⁽²⁾ こうした評価は1980年代の改革開放以降の中国都市社会史研究における中間団体に対する評価と共通する部分があり、注目される。

日本人は、キリスト教文化を背景に慈善を「発見」したヨーロッパ人とは異なり、中国との商業競争に向けて行われた調査の過程で慈善の存在を認識していった。20世紀前半、日本は上海に東亜同文書院を設立し、中国経済の実態について詳細な調査を行った。その創立メンバーの一人であった根岸佶は商工事情を研究し、中国のギルド組織の重要性を指摘した。しかし、ギルド組織の活動

(1) 広東で1832-1851年まで刊行。全20巻。

(2) Yu-Yue Tzu, *The Spirit of Chinese Philanthropy: A Study in Mutual Aid*, New York, Columbia University, 1912. 夫馬も本書の価値は「中国に自生した善会・善堂が近代都市行政と近代地方自治の基礎となりうることを初めて示した」点にあるとしている。

を分析する中で、相互扶助としての慈善活動が充実していたことが明らかにされた（根岸 1932）。

戦中戦後にかけて善会・善堂の歴史にもっとも関心を持った学者は仁井田陞と今堀誠二である。社会における「生きた法」に関心を抱いた彼らは現地でギルドや善堂の史料を收拾し、それらが都市行政と深く関わっていた点を評価した。しかし、中国の「封建社会」を支配・被支配の関係において捉えていた彼らは、善堂やギルドを国家が民衆を支配するための「道具」であったと見なした。

これに対し、夫馬はヨーロッパにおける都市発展の歴史をモデルにしている点やギルドというフィルターから善会・善堂をも捉えたことを厳しく批判している。確かに仁井田・今堀の研究はマルクス史観やヨーロッパ都市史研究の影を持っていた点は今日から見ると問題であるが、善会・善堂とギルドを中間団体と位置付け、そこにおける「仲間的結合」に注目していた点は注目すべきであろう。善会・善堂の歴史が有した固有の特徴に着目するのか、それとも宗族や同郷組織などといった中間団体との共通性を認めて、慈善の歴史の全体像を捉えようとするのか、研究の視点の相違ではある。

2 「市民社会」への展望：1980年代以降

なぜ1980年代に入ってから慈善に関する歴史研究が盛んになったのか。まず先にも述べたように中国の改革開放政策の影響がある。外国人研究者による中国での現地調査が可能になり、理想化された社会主義中国ではなく、近代化によっても変わらない中国伝統文化に関心が向いていった。革命史観に拘泥してきた中国近代史研究もこれ以降、近代に先行する明清期の社会に強い関心を示すようになった。近代史の捉え方において、「断絶」から「連続」面を重視するというパラダイムの転換がなされたのだ。また、研究を取り巻く環境について、図書館や檔案館などで徐々に史料が公開されていったことにより、様々なテーマでの研究が可能になっていった。そして、1989年の北京で起きた学生らの民主化要求運動に端を発した六・四天安門事件は中国都市史研究に「公共性」という魅力的なテーマを提供することに寄与した。

そして、何よりも欧米における社会史研究の影響は大きかった。とりわけアメリカの地域研究の中から生まれた中国都市史研究は日本の中国史研究者に大きな衝撃を与えた。その代表作は、ロウによる都市漢口に関する研究、そしてランキンの都市エリートに関する研究である（Rowe 1989, Rankin 1986）。彼らはヨーロッパ史において市民社会を準備したような「公共領域」（public sphere）が清末の中国にも出現したとする。官僚機構の外で民間の都市エリートらによって公的な活動が展開され、実質的な自治が実現していたと評価された。ギルドや善会・善堂もそうした公的な活動の一部を構成していたという。

こうしたアメリカの都市史研究の影響を受けながら、日本でも善会・善堂など慈善の歴史に関する新しい研究が生まれていった。まず、夫馬進が明末の同善会の活動を紹介し、民間人による善会結成が明末清初にさかのぼることを明らかにし、清末民国初期までつづく善堂の分析から、近代地方自治の担い手としての位置づけをも展望した。その後、夫馬は善会・善堂の史料を網羅的に収集し、『中国善会善堂史研究』として集大成した（夫馬 1997）。

その後、梁其姿も明清期の善会・善堂に関する論文を発表、『施善と教化』としてまとめられた。

梁は16世紀末から19世紀中期までの慈善組織を三つの時期に区分し、その担い手と意識形態の変化を明らかにした。とくに清朝以降の変化を「儒生化」として捉え、慈善組織の担い手が全国的に著名な儒者から地方商人や地方紳士などに代わり、救済の範囲も都市内部、郷鎮という狭い範囲になったとする。清朝の慈善組織を「公共領域」の議論と結び付ける傾向に対して、梁は一直線に発展するような歴史モデルではなく、時代によって担い手や意識も変わるような複雑な歴史として捉える必要があると慎重な立場を取る。その上で、明清期の善堂の特徴として、民間の非宗教勢力を中心に組織的・持続的に運営され、地方エリート・商人・儒生・一般人などが寄付および運営に携わり、清朝政府もこれを承認・奨励したと述べている。基本的に善堂が秩序維持のための組織で、反政府的ではなかった点にその持続的発展の理由の一つがあるとしている（梁 1997）。ここに明清の慈善組織が「市民社会」を準備する基盤とならなかった歴史的背景を見ることができよう。

慈善と中国の近代化との関連については、上海史研究が重要な研究領域となっていた。まず、高橋孝助が上海における善堂を取り上げ、上海史のテーマに善堂の視点を導入した（高橋 1984, 1985）。そして、小浜正子は清末民国期上海の慈善組織を分析し、「地方公益」という理念のもとに慈善活動が行われたとして、「公共性」の形成を指摘し、近代国家と公共性の議論を進めた（小浜 2000）。また小浜は民国期を含めた慈善団体に関する研究史整理を行っている（小浜 2007）。

ところで、伝統的な「善挙」と近代的な「慈善」とはその価値観においてどのような違いがあるのだろうか。夫馬は、清末上海の義塚問題⁽³⁾を取り上げて、1900年代のはじめに「善挙」を含めた大きな価値観の転換があったとしている。それは、主権の保持、市場の開拓、交通の利便、衛生の確保という新しい価値観、新しい「公益」が登場することで、伝統的な「善挙」の時代は終わりを告げ、道路建築・教育など近代的都市行政が優先される時代に移り変わる。その中で善挙は都市行政の一環としての「慈善」へと変化していったとする（夫馬 1997）。具体的には、吉澤誠一郎が清末期の天津の「習芸所」を取り上げて、貧民を単に収容するだけの善挙から、教育し働かせることを目的とする救済事業へと変化したことを明らかにした（吉澤 2000）。また慈善家の思惑や政府の認識など、慈善を取り巻く理念（建前）と実態（本音）の二面性という側面にも注目すべきであろう（岩間 2000）。海外の社会史研究の影響を受け、中国においても慈善の近代化に関する歴史研究が開始された（朱英 1999）。

3 華人社会の個性として

中国近代の趨勢として、伝統的な「善挙」が衰退し、新しい価値観にもとづく近代的な「慈善」へと移り変わったことは否めない。しかし、旧来の価値観やそれにもとづく善挙が突然消滅することはない。近代とは、伝統的要素と近代的要素とがせめぎ合い、或いは混然となった時代であろう。そして、その様態は各地域の中国人社会によって違いがあったと思われる。

(3) 租界の拡張に従い、同郷組織や善堂が管理していた棺柩や義塚の存在が衛生や道路敷設などを進める租界当局に批判され、郊外への移転を余儀なくされていった問題。寧波人ギルドの四明公所の義塚をめぐることは二度にわたる、武力衝突が発生、死傷者を出すなど外交問題化した。

先に述べたように上海など江南地域における善堂・慈善組織の研究の多くが「近代への転換」を重視したのに対して、華南地域や香港における慈善組織の研究は、どちらかと言うと、歴史的変化の相よりも華人社会の個性を理解しようとする立場からの研究が多い。学問的な手法としては文化人類学、宗教史などの研究がそれに当たる。

歴史家ではあるが、人類学的なアプローチから華南地域の現地調査を行った可児弘明は社会史ブーム到来前、1970年代に香港の慈善組織である保良局が所蔵していた帳簿や議事録などを調査し、その活動を詳細に示した（可児 1979）。中国有数の移民送り出し港であった香港では、移民の保護や助葬、医療など広範な慈善活動を行う東華医院が1870年に設立された。その後、保良局が婦女子の保護を専門的に行う組織として独立し、人身売買や誘拐、娼婦にされた女性たちの救出と親元への護送に当たった。可児は、結局のところ保良局は儒教的な秩序の維持が目的であったという評価を行った。香港から東南アジアへと誘拐され、ようやく保護された女性の自白調書など生々しい史料の羅列は、さながら「香港版残酷物語」のようであるが、官の保護が届かない地域における過酷な社会的現実とそこに必然的に発達した慈善活動との関係性について考える時、「市民社会」とは程遠いことを思い知らされる。

その香港を代表する慈善組織、東華医院については、エリザベス・シンが『権力と慈善』を著している（Sinn 1989）。シンは、香港のアカデミズムで、中国史とは異なる香港史という学問領域が形成された時期の学者で、東華医院は香港の華人社会を代表する組織として清朝や植民地政府との外交交渉に当たったことを明らかにした。東華医院に関しては、帆刈浩之が、慈善活動、とくに「運棺」（異郷で死去した同郷者の遺体を故郷に送還すること）に注目し、慈善活動が充実した背景には近代の出稼ぎ戦略が存在したこと、そして、世界的規模で展開した広東系華人のネットワークが東華医院を結節点とした慈善で結ばれていたことを示した（帆刈 2011）。なお、帆刈は上海の四明公所が行った慈善活動についても同様の研究を行っている。

さて、今まで検討してきた善会・善堂、そして同郷組織や慈善組織は基本的に宗教色の薄い性格を有していた。正確に言うと、脱宗教である点に「近代性」を認めようという中国史研究者の歴史認識が働いていたということだろう。しかし、それはヨーロッパ史研究の「悪しき」影響の一つだと思われる。中国大陆を除く華人社会で現在に至るまで慈善活動を展開してきている組織の多くは宗教結社である。教化や信仰を目的とする慈善行為を本論の範囲に加えることにいささかの躊躇はあるが、中国人社会における慈善の文化を考察する場合、素朴な民間信仰にもとづく慈善を無視することはできない。

中国人の慈善行為を促すことに貢献した書物である「善書」は明代以来の出版文化の発達なしには有りえなかった。慈善を行った組織である善会・善堂に関する研究とともに、「媒体」としての善書の研究も重要である。善書の研究は酒井忠夫によって集大成されている（酒井 1960）。酒井は戦前、上海の東亜研究所で道教や幫会の研究に従事した経験から、民衆の視点から中国を捉えることの重要性を認識していたのであろう。

その善書の内容でもっとも大きな位置を占めたものが「功過格」である。酒井によれば、「中国の民族道徳を善（功）と悪（過）とに別ち、具体的に分類記述し、その善悪の行為を数量的に計量記述してある書物」で、年末に功と過を計算し、その賞罰を期するもので、中国の民族道徳の本質で

あるという。宗教信仰と利己的打算とを含むような慈善の動機を見てとることができる。

香港や広東の道教結社や善堂については志賀市子の研究がある（志賀 2005, 2008）。自ら香港の一道壇のメンバーになったという逸話を持つ志賀は文献と実地調査に拠りながら華南地域における近代以降の宗教運動の拡大について歴史的実態の解明を進めている。また、タイを中心に東南アジアの華人系慈善団体については玉置充子が現地調査を進めている（玉置 2006）。

まとめ

これまで見てきたように、1980年代以降の中国の善会・善堂を中心とする慈善に関する歴史研究は、総じて「市民社会」の形成を展望した問題関心から研究がなされてきたと言ってよい。これは中国の近代化という現実的関心が基底にあり、六四天安門事件に象徴される民主化要求運動と微妙に呼応する側面を持っていた。そして、近代ナショナリズムが高揚する20世紀初頭における朱友漁の研究において、同様の問題意識がすでに表明されていたという事実は、一世紀にわたり中国の近代化が解決してこなかった事態の深刻さを示しているようにも見える。

これまでの研究の系譜として次の3つの流れを指摘できよう。

- ①善会・善堂（江南中心、非宗教的）→近代的慈善へと転換→「市民社会」を展望
- ②同族・同郷組織による慈善（相互扶助が基調）→1950年代に中国では消滅、華南や海外華人社会では移民社会を支える
- ③宗教結社の慈善（華南中心、善書の研究）→東南アジアに拡大

今後、慈善に関する歴史研究は地域差を考慮に入れる必要があろう。江南と華南では民衆の生活を支える社会の仕組みが異なる。また海外華僑・華人社会を視野に入れた研究が重要になるであろう。そこでは慈善の目的はコミュニティーの保護ではなく、ネットワークの維持に置かれていたのである。ユダヤ人などディアスポラ的な民族との比較研究が待たれる。国家が行う社会福祉とは重ならない領域を中国人の慈善はカバーしてきたことを忘れてはならないだろう。

さらに、組織の研究ではなく慈善家や受け手の側の研究など、問題領域を広げていくことも重要であろう。なぜ華人社会において慈善が必要とされつづけているのか。歴史学だけでなく、文化人類学をはじめとする隣接学問との共同研究がますます必要となっている。

（ほかり・ひろゆき 元・川村学園女子大学文学部教授）

【文献リスト】

- 今堀誠二（1953）『中国の社会構造：アンシャンレジームにおける「共同体」』有斐閣。
- 岩間一弘（2000）「中国救済婦孺会の活動と論理：民国期上海における民間実業家の社会倫理」『史学雑誌』109-10。
- 可児弘明（1979）『近代中国の苦力と「猪花」』岩波書店。
- 小浜正子（2000）『近代上海の公共性と国家』研文出版。
- 小浜正子（1999）「最近の中国善堂史研究について：前近代中国の民間慈善団体をめぐって」『歴史学研究』721。
- 小浜正子（2007）「中国史における慈善団体の系譜：明清から現代へ」『歴史学研究』833。

- 酒井忠夫（1960）『中国善書の研究』弘文堂。後に『増補 中国善書の研究』（上下巻，酒井忠夫著作集 1,2，国書刊行会，1999,2000）として再版。
- 志賀市子（2005）「近代広州の善堂：省躬草堂の医薬事業を中心に」『茨城キリスト教大学紀要。人文科学』39.
- 志賀市子（2008）「中国広東省潮汕地域の善堂：善挙と救劫論を中心に」『茨城キリスト教大学紀要。人文科学』42.
- 朱英（1999）「戊戌時期における民間慈善公益事業の発展」（緒形康訳）『中国21』5.
- 芹澤知広（1996）「香港における華人慈善団体の現在：人類学と歴史学の協同へ向けて」『年報人間科学（大阪大学）』17.
- 芹澤知広（1997）「慈善団体から見た華南地域の統合--近年のマカオの事例を中心に」『年報人間科学（大阪大学）』18.
- 仁井田陞（1951）『中国の社会とギルド』岩波書店.
- 高橋孝助（1984）「近代初期の上海における善堂：その「都市」的状況への対応の側面について」『宮城教育大学紀要』第18巻第一分冊.
- 高橋孝助（1985）「滬北棲流公所の成立：上海租界の善堂」『宮城教育大学紀要』第19巻第一分冊.
- 玉置充子（2006）「タイ華人団体の慈善ネットワーク」『海外事情』54-10.
- 根岸佶（1932）『支那ギルドの研究』斯文書院.
- 夫馬進（1997）『中国善会善堂史研究』同朋舎出版.
- 帆刈浩之（2011近刊）『越境する身体社会史：華僑ネットワークにおける慈善と医療』風響社.
- 星斌夫（1988）『中国の社会福祉の歴史』山川出版社.
- 吉澤誠一郎（2000）「善堂と習芸所のあいだ：清末天津における社会救済事業の変遷」『アジア・アフリカ言語文化』59.
- 鄧雲特（1937）『中国救荒史』上海商務印書館，のち台湾商務印書館（1966）.
- 梁漢明（1997）『施善與教化：明清的慈善組織』聯經出版（台湾）.
- Rankin, Mary B. (1986), *Elite Activism and Political Transformation in China: Zhejiang Province, 1865-1911*, Stanford, Stanford University Press.
- Rowe, William T. (1989), *Hankow: Conflict and Community in a Chinese City, 1796-1895*, Stanford, Stanford University Press.
- Sinn, Elizabeth (1989), *Power and Charity: the early history of the Tung Wah Hospital*, Hong Kong, Hong Kong, Oxford University Press.
- Tzu, Yu-Yue (1912), *The Spirit of Chinese Philanthropy: A Study in Mutual Aid*, New York, Columbia University.